

第107号

発行

令和7年11月28日

責任者

福島県公立学校

退職校長会安達支部

佐藤英之



【巻頭言】

心に残る光景

副支部長 高島徹也

私の車が橋の上で長い渋滞の列に巻き込まれ待たされることとなった。しかし私は、その渋滞など吹き飛んでしまう思わぬ光景に出会い、心奪われ、そして、その光景に、私の心は和み、思わず満面の笑みに包まれた。

私が目にした光景。それは、黄色の帽子をかぶり、一列に並び下校して行く一年生の子どもの姿であった。その姿の可愛いこと、可愛いこと。そして、その姿の可笑しいこと、可笑しいこと。実に何と滑稽な姿であつただろうか。というの、子ども達は、一列に並びながらも、皆、九十度近くまで腰を曲げ、にこにこしながら、「く

様な恰好になって歩いていたのである。きつとランドセルが重かったのかも知れない。背中を伸ばして背負うと、後方に引張られるから腰を曲げて背負っていたのかも知れない。一年生の子ども達なりに考えた背負う方法なのかも知れない。皆で腰を曲げて並んで歩くことが楽しくてニコニコとしていたのかも知れない。などと、想像をかけ巡らした私であつたが、とにかく、その一年生の滑稽な可愛い一瞬の姿が鮮烈に私の心に残り離れなかった。と同時に、初めて一年生を担任した時のことを懐かしく思い浮かべた私であつた。

思い起こせば、実はこの私も

現職時代、一年生を担任した時があつた。卒業担任として六年生を送り出して迎えた新年度、私は、一年生三十七名の担任として子どもの前に立っていた。卒業した子ども達には「先生が一年生の担任だなんてほんとに信じられないね。」などと言われたが、ずっと高学年の担任だった私にとって、この一年生担任の職務は、

これまでの教師経験とのギャップがはなはだしく実に変な日々の連続であつた。じつとして座ってられない。ずっと話を聞いていられない。すぐ飽きる。すぐ他方に目を奪われる。説明をしても、すぐに「どうやるんですか。」と一人一人聞きに来る。自分の心の趣くまま動くとする子ども達。その大変さは、数え上げればきりがなかったように思う。人間、何でもそうであるが、「言うは易く行うは難し」であり、「見るとやるとでは大違い」であることを痛感した私であつた。そしてこの一年生との出会いは、私の教育観や指導観といったものをも

う一度見つめさせるものとなり、

教師としての人間的幅といったものを深く耕し、大きく広げてくれるものとなった。一年生の子ども達は、幾分、教師の職務や指導に慣れつつあつた私に、『一人一人に向き合い、一人一人を理解し、一人一人に心を配り、一人一人が生きる』教育や指導というものの有り様を、その原点というものを、再度、遠慮なく突き付け、問いかけ見つめさせたのであろうと思う。そして、この一年生担任の経験は、その後の教頭職や校長職の学校経営や運営においても、大いに生きるものとなったことは確かなことであると言えよう。

『自分でやってみると分かります。その人の大変さが真に分かります。だから、やってくださっている方に、只々頭が下がります。ありがたいという尊敬と感謝の思いに包まれます。そして自分も、少しでも力になろうと思うのです。』この思いは、鮮烈に私の心に残り離れなかった一年生の滑稽な可愛い一瞬の姿と同様、退職して何年を経ようとも、私の心から離れることは無いと思っています。

【教育随想】



「教員としての誇りと自信のために」

二本松市教育委員会教育長 渡 辺 惣 吾

二本松市では、令和四年度から全国的にも学力向上等の先進市である秋田県北秋田市に市内小中学校の教員代表を派遣しています。本年度も十月二十日、二十一日の二日間、校長、教頭、教諭の計六名が、義務教育学校、小中連携を進めている小学校、中学校を訪問し、学校経営の概要について説明を受け、授業を参観させていただきました。私も二十日に参加し、令和五年度に開校した義務教育学校阿仁学園を訪問し、小中の時程管理、学年の区切り、教員の持ち時間等、多くのことを学ばせていただいた。各教室の授業は子どもたちと先生方のしつとりとした関係、構造的な板書等、教師個人と教師集団の質の高さを実感した。個別最適化の学び、指示待ちではなく主体的な学びの具現のため自由進度学習「マイプラン学習」も行っており、中学校社会科において、生徒が自分のペースで学習していました。説明の中で、三、四年生の総合的な学習では、地域の特産であるクロモジを使ったお茶の製品化、販売を行う活動、また全校生による校区を走る秋田内陸線の駅舎をアートで飾る地域活性化の活動等が

紹介され、学んだことを外部に発信するアウトプットの活動は、自分のこれまでの概念の枠を飛び越える活動でした。特に考えさせられたのは、校長先生の、「子ども主体とはいえ、全てにおいて教師は腹案をもって子供に任せる」という言葉で、それを裏付けるような、教師の深い教材研究と子ども理解に基づいた授業、教育活動が展開されていました。

教師教育研究者のアンディ・ハーグリーブスは、教師の専門職としての資本として、人的資本（個人の専門知を意味し、知識、スキル、心構え、子ども理解等）、社会関係資本（チームワーク、信頼、協働の文化と専門職のネットワーク等）、意思決定資本（判断、実践の共有、同僚との省察等）の3点をあげています。（ハーグリーブス他、2022）教師個人の力量形成は、個人の人的資本のみでなく、他者との関係性（社会関係資本）、校内において他の教師とともにどのように意思決定をしていくか（意思決定資本）によるという考えは、これまでの自分の教職経験を振り返った時、納得できるように思います。

現在、働き方改革が進められていますが、この改革が実りあるものとなるためには、教師が専門職として、子どもの成長に喜びと手応えを実感し、教員としての誇りを実感できる「働きがい改革」が重要だと思っています。こういった教師としての誇りは、一朝一夕に形成されるものではなく、日々の授業と振り返りの積み重ねであり、その振り返りには同僚からの感想や意見、自分の過去の経験、他の学級・学校での実践、教育雑誌等の実践記録、研究者の構造的で系統的な理論等の「鏡」を参考として多面的な分析が重要です。

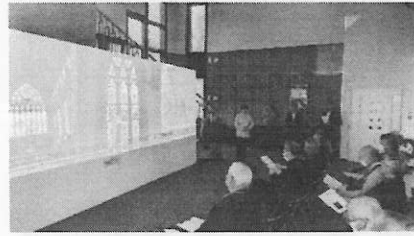
そのためには、教員一人一人が自分事と捉えることができる校内外での研修が大切になってきます。本市においても、様々な研修とともに、教員が自らの実践を振り返り、専門性向上のための「教職員研究論文」の募集、また、学校訪問で指導助言を行ったり、探究的・協働的な学びの観点から実践を行い、実践記録としてまとめたりする「指導員制度」を行っています。どちらも、多忙化解消ということで取りやめとなる傾向にあるようですが、大切にしたい取組です。

今後も、教員一人一人が専門職としての誇りと自信を培い、子どもがまん中の教育を推進するため、教育委員会はどうあるべきか、追究していきたいと思っています。

第二回研修会

第二回研修会は、「ふるさと

に学ぶ」という趣旨のもと、令和七年十月十六日（土）に、参加者十六名で「本宮市ふれあい美術館」見学会を開催した。見学会に先立ち、ホールで館長様から歓迎のご挨拶と今回の企画展



「ウイリアム皇太子来市十周年記念 ウイリアム・モリス 英国の風景とともにめぐるデザインの軌跡」について

の説明をいただいた。そのあと、一階と二階の展示ホールに繰り広げられたウイリアム・モリスの華麗なデザインの世界を堪能した。最後に一階の常設展「英国自動人形とポール・スプナー」を見学した。

また、隣接する「本宮市歴史文化収蔵館」に移動し、市が所蔵する貴重な文化的・歴史的資

料を見学することができた。さらに、図書館システムネットワークや様々な企画を工夫している「しらさわ夢図書館」を見学して解散となった。

今回の研修では、本宮市白沢地区に集結している文化・歴史施設を見学することができ、「ふるさとに学ぶ」良い機会となり、有意義な研修会となった。

研修会参加者の感想

第二回研修会に参加して

伊藤 末吉

第二回研修会は十月十六日（木）に実施されたが、あいにくの小雨模様であった。しかし会場の白沢ふるさと美術館などの館内は適温で、有意義な二時間を過ごすことができた。

今回は、『ウイリアム・モリスデザインの軌跡』という内容であり、作品を鑑賞していて強く感じたことは、自然を観察し表現することに関しては、日本人と英国人の感性には似たものがあるということであった。それは、日本人も英国人も島国に

住む民族なので、生活上でのきめ細かさや自然の変化への敏感な感覚などは共通するのではないか？ということである。

ただし、違いも強く感じ、それは自然を観察し表現することにおいて、英国人はより緻密に行う方向に努力し、日本人はより簡明化する方向に努力するのではないか？ということである。

このことは、私の個人的な印象であり一般化はできないが、今回の研修で日英両国民の感性への考察ができたことは、私にとり非常に有意義なものとなった。

次に別館において、縄文土器や白沢地区で使われていた農機具類の展示を見学したが、このことは私の実生活を振り返るよい機会となった。



【縄文土器】

今回の研修で感じたことは、『人間の歴史や文化の多様性の意義』であり、それらのことを学べる行政機関の努力のあり方

や方向の健全性を大切にしたいという思いであった。



【美術館にて】

叙位叙勲受章の紹介

正六位

鈴木 義雄様

令和七年八月三十日ご逝去
（元糠沢小学校長）

正六位

小沼 利久様

令和七年九月三日ご逝去
（元赤木小学校長）

正六位

☆☆心よりご冥福を
お祈り申し上げます☆☆

鈴木 正宏様

令和七年十一月十日ご逝去
（元二本松第三中学校長）

会員随想

不登校の子どもの

居場所になるように



嶋原 和哉

平成二十九年九月に、二本松市内の幼児・児童・生徒およびその保護者の学校教育上の教育相談環境を整えることと、不登校児童・生徒への適応指導等の支援体制を充実させるために、二本松市教育支援センターが開所した。センター内には、不登校児童・生徒の適応指導を行う教室「ふれあいスクール」があり、子どもたちの社会的自立を目指す支援を行っている。

私は、令和三年四月から二本松市教育支援センターに勤務を始め、令和五年からは所長として業務に携わっている。

不登校児童・生徒を支援する「ふれあいスクール」は、子どもがいつでも自分の居場所として利用できるように、毎日（長

期休業期間を除く）開設しているが、利用者数は多くはない。

そこで、学校に行きたくないと思っている子どもたちの不安を小さくして、安心して利用できるようにするため、所員同士は「〇〇先生」と呼ばずに「〇〇さん」と呼ぶことにして、学校と同じような場所ではないと感じることができるようになっている。さらには、ふれあいスクールでの過ごし方を、子どもの思いを受け止めながら、目的意識を持たせることに留意していっしょに考えるようにしている。

不登校になる理由は様々であるが、子どもにとって、不安や悩み、困り感を話すことができない、また落ち着いた気持ちで他人とかわかることができる居場所があることは、不登校を乗り越える力を養うために欠かせないことであると私は考える。

「ふれあいスクール」が、子どもたちが未来に向けて歩み出すための居場所となるよう、これから所員と力を合わせて取り組みでいきたいと思います。

会員十年目の近況報告

「十年目の近況報告」



小濱 伸

教職三十八年を終了後、四年間福島県青少年会館に勤めました。福島県内五十九の約七割の市町村民会議事務局を訪問し、県の事業参加・課題解決への協力依頼等に奔走したことや内閣府主催の中央研修会への参加が大きな思い出になりました。また、県青少年健全育成推進大会の準備・運営や家庭の日作品コンクールの募集、審査、表彰に携わったことが特に印象に残りました。学校現場と異なる角度から青少年の健全育成に携われたことはたいへん有意義でした。

退職校長会安達支部では、微力でしたが、皆さんのご協力のもと、会計を八年間務めさせていただきました。

六十歳代の時、ネットで目に留まったのは、「人生の教科書ハッピーライフスタイル」の

『六十代がしておきたい三十のこと』でした。

その中から、今後もできるだけ実践していきたいものを参考までにいくつか紹介します。

○六十代からは「新しい生きがい」が必要になる↓新しい生きがいを見つける。

○七十代の足腰を決めるのは、六十代の過ごし方↓意識して体を動かす機会を作る。

○何も興味がなかったときは、本屋に駆け込む。

○定年退職後は前の会社の名刺を捨てる。名詞が邪魔をする。

○定年退職すれば今までの成功体験は忘れて初心で始める。

○地元のために活動する。地域イベントに参加する。

○六十代に必要なのは「教える姿勢」より「教わる姿勢」↓教えて下さいを口癖にする。

○古い話ばかりを繰り返してないか↓毎日新しい行動を心がけ、新しい話題を話す。

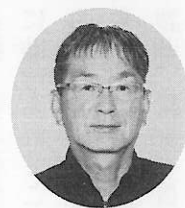
○ウォーキングは、夫婦で楽しむのが一番。

○健康ともしっかり健康診断は必ず毎年受けること。

私は古希を迎え、これからの人生も心身の健康を大切にしながら過ごしていく所存です。

会員十年目の近況報告

「待ってますよー」



加藤 純一

朝、携帯電話のラインに時々入っているコメントです。
退職後は、週二回程度硬式テニスをやると決めていたので、市のテニスクラブに入会しました。

メンバーは、元公務員、住職、主婦、元教員、整体師等、退職された方、自営業の方です。現在は、七十才以上の会員がほとんどでコートを走り回っています。

会に入って驚いたのは、練習は和やかな雰囲気なのですが、試合になると勝負にこだわりのさまざな攻撃を仕掛けてきます。私は高いボールが苦手です。返球する度に高いボールを打ってきます。結局ミスをして、最後は負けです。また、七十才後半の方とダブルスを組んだ時、正直お互いに勝てると思っていませんでした。なんと勝ったの

です。ペアの方はとても喜び、仲間に「私、勝ったのよ。」と言いついていました。楽しくテニスをしていたのですが、

67才・腰部脊椎管狭窄症の手術
69才・脊椎管狭窄症再発

・左肩腱板一部断裂

脊椎管狭窄症再発では、歩くと左足がしびれ歩行が困難になったり、腱板一部断裂では、左肩が上がらなくなったりしました。現在は、狭窄症が再発し、お尻に痛みが出ています。

医師には、「加齢からくることもあるんですよ。」と言われて年齢は確実に増えていると感じました。一番心配していたのですが「運動は続けてください、筋肉は動いたほうが、筋力の低下を防いだり、血流をよくしたりします。」と言われ一安心しました。

テニスを休んで、しばらく経ってから、「待ってますよー」とラインが届きました。試合をするために、一人足りないためのコメントですが、この時は、感極まりました。古希を迎え、より新鮮な気持ちで生活しています。

転入会員の挨拶

ふるさとへ戻って!!



郡司 博明

退職後五年間は福島支部に所属していました。今年度、転居を機会に転入会員として安達支部に所属させていただきました。

私が退職した五年前はコロナが全国的に流行し、三月四日から二十三日まで臨時休業となりましたが、卒業式だけは挙行しました。離任式もなく、三十一日まで勤務し現役を終わったことを思い出しました。

現役時代は、安達地区には通算十二年勤務しました。教諭で三年、教頭で九年です。勤務地は、旧東和町、二本松市、本宮市と各市町にわたっています。

教諭では、小教研算数部に所属し、毎年研究物展に出品していました。先輩や部員の先生方から指導をいただき、大変勉強になりました。また、旧東和町では七つの小学校があり、七校対抗の陸上大会が開催されてい

ました。私が在任中、数十年ぶりに優勝し、みんなでがんばりを讃え合いました。

教頭時代は、東日本大震災が一番の思い出です。市の会議中に地震があり、急いで学校に戻りました。校舎は新築なので被害はありませんでした。体育館は地区の避難所となり、停電・断水の中、三百人位が避難し、支援の手伝いをしました。校庭や校舎内の放射線測定も、一年間、一日二時間かけて行っていました。

現在は、松一中で非常勤講師をしています。今までの経験を生かし、少しでも生徒のためになればと励んでいます。

三十数年ぶりにふるさとへ戻ってきたので、他地区での経験を生かして、今後も励んでいきたいと思っています。

最後に、教頭会時代に大切にしていた合い言葉

「安達はひとつ」

この理念を今後も大切に引き継がれることを望みます。

新入会員の挨拶

教育は未来づくり



菅野 芳弘

昨年度末に、塩沢小学校にて役職定年になりました。私達の代は、定年が二年延長になり、六十二歳までになります。私も今年度特例任用校長として、安達太良小学校に勤務しております。このたび、退職校長会の新会員として加えさせていただきますが、まだ現職校長会員でもありますので、退職現職両方の校長会に在籍し、なんとも不思議な感覚です。

さて、これまでの教職員人生を振り返りますと、周りの方々に助けられてここまでやってこられたという思いでいっぱいです。子供達、同僚の先生方、保護者、教育委員会の皆様に感謝しかありません。教員として常に意識してきたことは、「教育は未来づくりである」ということです。教員は、持続可能な明

るい未来社会をつくるための人材を育てる素晴らしい職業だと思っています。私はその誇りをもって教職に就いてよかったと思っております。

教諭時代は、高学年担任を中心としてたくさんの卒業生を送り出すことができました。校長としては、特にふるさと学習に力を入れ、探究的な学習から発信力の育成を重視し、郷土愛を育むよう学校経営をしてまいりました。

現在勤務している安達太良小学校では、驚いたことに、以前私が担任した教え子と、本校教職員として一緒に勤務しています。延長して校長を続けたご褒美をいただいたような感覚です。若い先生方が一生懸命活躍しているのを見ると、明るい未来が期待できます。

今回、新会員になるにあたり、そうそうたる顔ぶれの退職校長先生方と本当に一緒に過ごしたのかと恐縮する限りです。これからもご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしく願います。



還暦後の登山と

行く末



及川 博陸

昨年度末に、四十年弱の教員生活を終えました。在職期間中は、先輩の皆様にお世話になりましたこと、心より感謝申し上げます。有難うございました。

この夏、南アルプスの聖岳（ひじりだけ）に登ってきましたので、そのことも含め還暦を過ぎた登山について感じていることを簡単に書きたいと思います。

初日、静岡にある登山口に近い駐車場に車を止め、八時間登って到着した稜線上の山小屋でテント泊をしました。

二日目。テントは張ったまま水等の本当に必要な物だけをザックに入れ、六時間歩いて聖岳山頂に立ちました。復路はテント場に戻るため、来た道をまた六時間かけて戻りました。長丁場の無茶な山行でした。

三日目。光岳（てかりだけ）に登る予定でしたが、前日までの強行が祟り体力も限界だったため止む無く下山を決めました。南アルプス南部は、ロープウェイの類いが一切ないことや、一つの山が非常に大きいために長い距離のアップダウンが続くこと、そして山小屋の数が少ないこともあって、体力や計画性が必要とされる所です。

山はいつでも登ることができるとよく言われますが、年齢を重ねるとそうではなくなってきました。今回も多くの人々が、歩きの遅い私を追い越していききました。この山域では自分は年長者なのだから仕方がないと、自分に言い聞かせながら歩くのみでした。少しずつ自分の老いを受け入れるに連れ、登れない山が増えてくることを実感した山旅でした。今回は何とか登れた聖岳は、悲しいかな次は登れない山の一つになることは決定的です。

今後は身の丈に合った山登りをすると思っていますが、光岳も登りたかったなあともちよびり後悔している自分がいます。